

No.
06

ELPA Vision

定期試験が問題だ

根岸雅史（東京外国語大学大学院教授・ELPA 理事）

秋田大学での英語プレイスメントテスト／
英語プレイスメントテストα活用の事例

帝京科学大学での英語速読アプリ SocDok 活用の事例

定期試験が問題だ

東京外国語大学大学院教授・ELPA 理事 根岸雅史



言語テスト研究の分野では、テストを high-stakes test と low-stakes test に分けることがある。Green (2013, p. 24) は、high-stakes assessment を “one that leads to decisions with serious consequences for the assessee” と定義している。それゆえ、多くの場合、high-stakes test は、TOEFL iBT や IELTS などの大規模テストを連想させる。それに対して、low-stakes test は小規模テストと連想される。小規模テストの例としては、小テストや定期試験などの教室内テストが挙げられるだろう。

確かに、毎日のように行われる小テストが、受験者の人生を左右するということはないだろう。しかし、定期試験はどうだろうか。日本の状況を考えてみれば、定期試験の結果は評定の重要な資料となっており、その評定は大学入試や高校入試における推薦入試の重要な資料である。

「平成 29 年度国公立大学・短期大学入学者選抜実施状況の概要」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/12/1398976.htm, 2019 年 5 月 2 日アクセス) によると、平成 29 年度国公立大学入学者総数のうち 35.2% が推薦入試によるものである。ちなみに、AO 入試は 9.1% だ。一般入試による入学者は半数ほどに過ぎない。私立大学に限定すると、推薦入試による入学者は 40.5%、AO 入試は 10.7% と、半数以上が一般入試を経ずに入学している。したがって、多くの高校生にとって、推薦入試は大学入学のための大きな選択肢の 1 つとなっていることがわかる。

Green (2013, p. 240) が “The same assessment may be high stakes for some assesseees, low stakes for others.” と言っているように、テストの重大さは個人によって異なるが、日本においては、評定結果ひいては大学入学につながる定期試験は、多くの生徒にとって high-stakes test と言えるだろう。

このように日本においては、大規模テスト並みの波及効果を持つ定期試験であるが、そこにはいくつかの大きな問題がある。1 つは、妥当性にかかわる問題だ。定期試験は、大規模試験と異なり、生徒からすると作成者の顔の見える試験である。それゆえ、作成者である教師は、定期試験を生徒の学習をコントロールする道具として使う傾向にある。日本の定期試験が測っているものは、多くの場合、授業の内容そのものである。既習のテキストや既習の問題を出題することも一般的だ。こうしたテストでは、「訳を覚えておく」や「答えを覚えておく」ことでいい結果が得られてしまう。問題は、このようなテストでいい結果を得た学習者が必ずしも英語力が高くない点である。

もう 1 つの問題は、テスト固有のタスクによる測定である。教科書や授業の中のどのような言語活動とも異なる「テスト・タスク」である。たとえば、空所補充の文法・語彙問題や並べ替え問題などは、言語活動とは言えない。これらの問題は診断的な役割を果たしてはくれるだろうが、実際に書いたり、話したりという言語活動がないということは、測定の観点からのみならず、波及効果の観点からも問題である。Green は以下のように言っているが、これは学習者にも当てはまる。

It is often claimed that high-stakes tests, in particular, have a detrimental effect on learning as teachers focus their efforts on the content of the test at the expense of skills that are not tested. (Green, 2014, p. 24)

テストに出ないものは、学習しないのである。

最後の問題は、重み付けの問題である。日本の定期試験の多くは、ボトム・アップ的に作られているために、配点が恣意的となっている。それぞれの問題タイプごとに作成した問題を積み上げていくので、結果的にそれぞれの大問がどのような重み付けかわからないのである。このため、総合点は、作成者の考える重みとは異なったものとなっている可能性もある。さらに、より深刻な重み付けの問題は、「話すこと」「書くこと」を測ること自体が、多くの定期試験で、そもそも行われていないことである。あるいは、行われていたとしても、その重みはきわめて限定的であることだ。

日本の定期試験の重要性は、気がつかないうちに、大きくなっている。だからこそ、そのあり方を大きく見直す時期に来ている。さもないと、日常の学習を恒常的にコントロールする定期試験が、日本中の英語学習者を誤った学習に向かわせ続けることになってしまう。

参考文献

Green, A. (2013). *Exploring language assessment and testing: Language in action*. Routledge.

秋田大学での 英語プレイスメントテスト／ 英語プレイスメントテストα 活用の事例

長年、英語プレイスメントテストを実施している秋田大学を訪問し、担当の先生に活用の事例を聞きました。

・秋田大学でのプレイスメントテスト導入のきっかけ、理由は何ですか。

リーディング中心の授業からコミュニケーションなものに変えようという教養英語の改革として、渡部良典先生（現上智大学）の紹介で ELPA のプレイスメントテストを導入しました。授業を効果的なものにするために、学生の学力を測ったうえで学力別にクラス編成をすることになりました。具体的にはリーディング中心だったものに並列的にリスニング、ライティングを入れ、それを統合して「大学英語」という授業名にしたものです。「大学英語」というのは English for academic purposes の訳ですが、4 技能に目配りしており、スピーキングは 1 年全 30 コマのうち、大学で起こりうる場面を想定したスキットを 4 つ作って、前期後期にそれぞれ 2 回入れています。

・英語プレイスメントテストから英語プレイスメントテストαに変えた経緯を教えてください。

学生の英語力の差が大きく、従来の英語プレイスメントテストでは学力が上の学生の成績が弁別できない、ということがありました。プレイスメントテストでは余裕で終わってしまう学生がいましたが、全員の学力をきちんと測りたいという意図です。テストを実施している医学部保健学科、理工学部、教育文化学部のそれぞれの学部の中でも差があります。英語教育コースは非常にできますが、理工学部の上のほうの学生も同じぐらいできます。また、(グラフィストロム先生が着任した) 8 年前に比べると入学時の英語力が非常に伸びています。一方、学力が上の学生は英語プレイスメントテストαで十分測れています、逆に学力が下の学生はもう精一杯で、あれ以上のレベルになるとついていけなくなる可能性があります。

・テスト結果をどのように活用していますか。またプレからポストと 2 回テストをしていて、学生の成績に伸長は見られますか。

クラス分け以外には個人へのフィードバックをしています。それぞれの教員によって結果の受け止め方はさまざまですが、意見を取りまとめてはいないため、特にカリキュラムに反映はしていません。学生の成績は伸びていると聞いています。なにごとにもエビデンスが求められる時代ですから、それを分析してテスト実施の根拠としています。(ELPA: CEFR や TOEIC 等他テストとの相関表を提示) それは学生のモチベーションにつながりますね。特に理工学部の学生は TOEIC を意識して勉強しなくてはならないと思っていますから。

・10 年以上プレイスメントテストを実施されている感想を聞かせてください。

10 クラス以上同時にテストを実施していますので、あまりにも手順が複雑だとさまざまな弊害があり得るのですが、このテストは非常に取り扱いがしやすいと思います。テスト実施の日だけに来てもらう非常勤の先生にも問題なく対応してもらっていて、安定して実施できています。

・コンピュータテストの導入は考えていますか。

これまで考えたことはありませんでしたが、入学時期はパソコン室が空いているため、そこを予約しての実施も可能です。今は年度始めの授業時間でテストをしているため、1 回授業を無駄にしていることになるので、コンピュータにすると春休み中に終わらせてパッとスタートが切れますね。すぐにコンピュータテストに切り替えることはないと思いますが、検討し始めることはできます。

ありがとうございました。(取材・構成: ELPA)



秋田大学キャンパス



ベン・グラフィストロム先生と大西洋一先生

帝京科学大学での 英語速読アプリ Soc Dok 活用の事例

今春、Soc Dok をリーディングの授業に導入した帝京科学大学を訪問し、担当の先生に活用の事例を聞きました。

・帝京科学大学での Soc Dok 導入の理由、意図はなんですか。

金谷憲先生からの紹介で Soc Dok を知りました。教育人間科学部の4月にできた国際英語コースで、リメディアル教育に使っています。英語専攻と言っても英語がすごく得意というわけではない、基礎学力が足りない学生もいるので。動名詞、不定詞、受動形、完了などの時制、関係詞など高校初級、中学校2、3年生で学ぶ項目にもひっかかることがあります。授業内で文法テストをしていて、7割の点が取れないと再試験にしています。中学高校の英語教員免許を取るだけでなく先生になるための学科と銘打っているのに、そういう学生をどうやって伸ばすかが私たちの仕事だと思っています。土台をつくるのに穴が空いていると土台にならないため、穴を埋める必要がある、という話を学生にしています。本人たちも自分の弱点がわかってきていて、春休みと夏休みに学科で別コースの勉強会があり、そこで弱点を埋める勉強をしています。

前期の一般教養科目のリーディングの授業で Soc Dok を導入しました。国際英語コースの専門科目のリーディングは別の先生の担当です。そちらではさまざまなジャンルのものを読ませるので、私の授業では読み方を教えたいと思いました。スラッシュリーディング、ラピッドリーディング、スキミング、スキヤニング、パラグラフリーディング、トピックセンテンス探し、テーマは何かなどリーディングのストラテジーです。多読のみ宿題にしていたのですが、それだけでは足りないで Soc Dok を入れました。

e ラーニングのほかの教材も見ました。5年ほど前、マルチメディア教室にリーディングメインのeラーニング教材を入れたこともありましたが、分量が多く難しいものはだめでした。短いものをたくさん読ませたいと思っていて、それには Soc Dok は分量もレベルもよかったのです。簡単なものでもきちんと読ませて自信をつけさせたいと思っていました。ファカルティメンバーも金谷先生開発のものならということで、導入に賛成してくれました。値段が安く、スマートフォンでできるのもよい点でした。パソコンに向かっていっせいに実施する必要がなく、電車の中などで学習できてしまいますから。

・Soc Dok に取り組んだ学生の反応はどうでしたか。

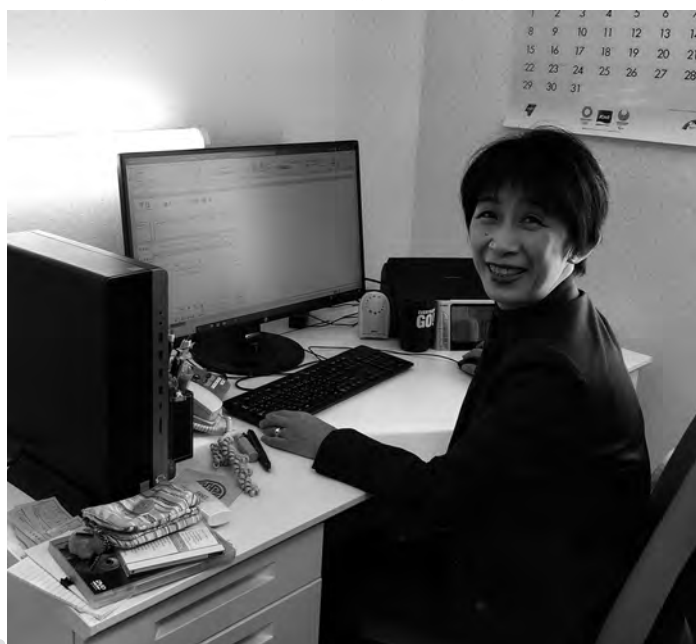
もっとたいへんなものかと思っていただけど、すぐできちゃうよ、と言っていました。コツコツ家庭学習するという習慣がない学生もいるため、こちらで何かしらの仕掛けをつくらなくてはなりません。そこで、期日までに全20問を終わらせたら、スコアをリーディングの成績に入れることにしました。斜め読みしてしまって正答率が低い学生もいましたが、手軽にできるので、ほぼ全員がクリアしました。ほかの大学でもリメディアル教育に非常に役立つのではないかと思います。

e ラーニングはひとりでは続きません。また分量が多すぎるとこなせません。現行の Soc Dok は中学校教科書から問題文を取ってきているとのことですが、語数は同じで、高校中級レベルから取ってくるのでしょうか。学生は長いものは読みません。レベルを少し上げると、ニーズがさらに広がるのではないのでしょうか。音とリンクしてシャドウイングなどをさせても効果があるように思います。

小学校英語が始まりますが、これからは小学校ですでに「英語嫌い」になったという児童が出てくると思います。その子たちが中学生、高校生になったときに、この Soc Dok で学び直しができるのではないかと思います。

ヒントをいただきました。ありがとうございました。

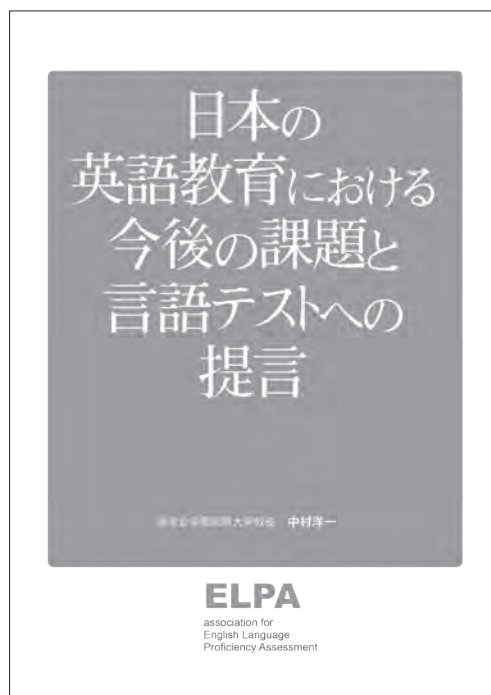
(取材・構成：ELPA)



馬場千秋先生

日本の英語教育における今後の課題と言語テストへの提言

中村洋一 著 頒布価格 500 円



はしがき

今、日本の英語教育は大きな転換期にあり、慎重に検討すべき多くの課題に直面しています。もとより、英語教育は時代の流れの中で、振り子のように揺れ動いてきました。時代ごとに、様々な理念や方法論が提案されてきましたが、残念ながら、収束した方向性を見い出しているとは言えないのが実情です。むしろ新たな課題が次々に出現し、それぞれの議論が枝分かれして、焦点が定まらなくなり、建設的な検討を難しくしているように思えます。

本冊子の「I. 英語教育の今後の課題 Standard Setting と Active Learning」では、振り子の振幅をできるだけ狭くすることを目指して、基本的な考え方を概観します。

テストを作成したり、実施したり、結果を分析したりという作業は現場の教師にとってきわめて日常的なものです。しかしあまりにも日常的であるがゆえに、改めてテストについて学ぶ機会はないというのが実情ではないでしょうか。

コンピュータによるテストは、長い年月をかけ、項目応答理論を中心としたテスト理論とその関連分野の研究が追求してきたものであり、我々の身近でも、すでに実用化されています。

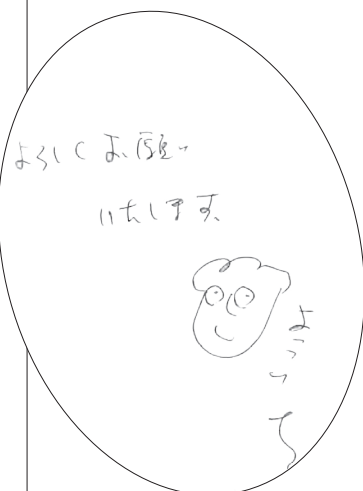
「II. 項目応答理論とコンピュータによる言語テスト」ではその基本的な考え方を把握します。その基本的な考え方の理解に立って、それぞれの教育現場で、今後どのように測定と評価に取り組んでいくのか、本冊子がその方向性を探っていく一助となれば幸いです。

本冊子「日本の英語教育における今後の課題と言語テストへの提言」中、「I. 英語教育の今後の課題 Standard Setting と Active Learning」は今回まとめたものです。「II. 項目応答理論とコンピュータによる言語テスト」は 2007 年発行、2013 年改訂の冊子「言語テストの基本的な考え方」を基に「項目応答理論 / Item Response Theory」「コンピュータによるテスト」の項を補筆し、同じく 2007 年発行の冊子「現場の教師のためのテスト設計・評価用語 100」を付録としました。

2019 年 10 月

著者 中村洋一

言語テストの設計はどうしたらよいのか、項目応答理論とは何か、テスト理論をから解説する決定版ついに刊行。用語集付き。



日本語リーディングリテラシーテスト 2020 年 発売開始

「主体的・能動的な学習」で必要となる総合的なリーディングリテラシー力がどの程度身についているかを、「知識・情報、データ読取、論理、文脈、内容把握」の 6 つの分野にわたる測定評価により把握することができる「日本語リーディングリテラシーテスト」が、2020 年、いよいよ発売開始となります。

3 月までは発売記念特別価格 300 円で受験していただくことができます。この機会にぜひ受験をお勧めします。テスト後、採点データ・スコアレポートをお届けします。

日本語リーディングリテラシーテスト 定価：620 円（税別）

特別価格 300 円（税別）※ 2020 年 3 月お申し込みまで。

■日本語リーディングリテラシーテスト問題概要■

<分野（内容）>	
◇仕様：マークシートによる多肢選択問題	1：知識
◇文章出題レベル：高校国語総合レベル	2：情報
◇試験時間：約 50 分	3：データ読取
	4：論理
	5：文脈
	6：内容把握

No.
06

ELPA
Vision

2019 年 12 月 20 日発行

発行人：金谷 憲 ロゴ・フォーマットデザイン：ユーフォーブックス

表紙写真：橋本志保（鳥取砂丘 ゼロ・パラグライダーズスクール練習風景）

発行所：特定非営利活動法人（NPO）英語運用能力評価協会（ELPA）

〒102-0074 東京都千代田区九段南 4-3-4 大江ビル 1F

Tel: 03-3230-0571 Fax: 03-3230-0572

クラス分け・レベル分け特化型テスト (CBT 対応*)

新登場 英語プレイスメントテスト **Advanced**

レベル別の定着度合い診断で、学生一人ひとりの英語力をしっかり把握し、学習・指導へ

発展 英語プレイスメントテスト **Advanced**

【英検準1級 / TOEIC®800点 程度まで / CEFR レベル A1 ~ B2】

特別価格 **1,000** 円 (税別) ※ 2020 年 3 月お申し込みまで。定価: 1,200 円

実践 英語プレイスメントテスト **α**

【英検準1級 / TOEIC®800点 程度まで / CEFR レベル A1 ~ B2】

定価 **1,000** 円 (税別)

英語プレイスメントテスト Advanced 英語プレイスメントテスト α		内 容	問題数	時間	スコア
Part1 リスニング		大意把握問題 / 情報収集問題 / 総合リスニング問題 音声再生一回のみ。Advanced は英文のみで構成。	30 問	25 分	300
Part2	語い・文法	英文のコンテキストを理解したうえで、語い・文法知識を運用する力を見る問題	48 問	15 分	300
	リーディング	大意把握、情報収集、要約、パラフレーズなどの技術を用いて解く速読型の問題	20 問	30 分	300
合 計			98 問	70 分	900

一人ひとりの実力にあった講義・学習のために
すばやく安価なプレイスメントテストを

標準 英語力把握テスト **CACE**

【英検3級～2級 / TOEIC®300点～700点 程度 / CEFR レベル A1 ~ B1】

定価 **750** 円 (税別)

英語力把握テスト CACE		内 容	問題数	時間	スコア
Part1 リスニング		大意把握問題 / 情報収集問題 音声再生一回のみ	14 問	13 分	100
Part2	語い・文法	英文のコンテキストを理解したうえで、語い・文法知識を運用する力を見る問題	24 問	12 分	100
	リーディング	大意把握、情報収集、要約、パラフレーズなどの技術を用いて解く速読型の問題	14 問	20 分	100
合 計			52 問	45 分	300

*CBT は個別実施となります。

英語速読アプリ
Soc Dok

Soc Dok は Web サイト上で動作する、新しい英語速読練習アプリです。英検 3 級レベルの問題の英文をひととおり読んで理解度チェックの正誤問題に答えると、自動的に WPM スコアが計算されます。授業の帯活動、講習、自学自習にお役立てください。

1 アカウント **360** 円 (税別) 三省堂版 / 東京書籍版 / 開隆堂版